

中等教育研究開発室年報 第33号 (2020年3月31日発行) 別冊電子版
2019年度 授業実践事例

保健体育科 高等学校第Ⅱ学年

応急手当の意義とその基本, 心肺蘇生法

授業者 松本 茂

(校内研究授業)

広島大学附属中・高等学校

保健体育科（保健）学習指導案

授業者 松本 茂

日時	令和元年 11 月 21 日（木） 第 2 限 9:40～10:30
場所	体育館
学年・組	高校Ⅱ年 1 組 39 名
単元	・応急手当の意義とその基本 ・心肺蘇生法
目標	1. 応急手当や心肺蘇生が必要な場面に遭遇した時に、とるべき行動を選択できるようにする。【思考・判断・表現】 2. 応急手当の意義や心肺蘇生法の手順を理解し、行動できるようにする。【知識・技能】

指導計画（全 2 時間）

第一次	応急手当，心肺蘇生法の理解具体的イメージ	1 時間
第二次	応急手当等，AED-CPR 実習	1 時間（本時）

本時の目標

- AED-CPR の意義や原理を理解し，正しい方法で救命活動に関わる知識や技能を習得する。
- 仲間と協力し合い，正しく AED-CPR が実践できるようになり，積極的に救命活動に参加できる態度を養う。

本時の評価規準（観点／方法）

- 心肺蘇生法の意義や原理を理解し，正しい方法で救命活動に関わる知識を習得する。（知識・理解／活動観察）
- AED の正しい使用方法や手順を身につけ，仲間と協力し合って心肺蘇生法が実践できる。（思考・判断／活動観察）

段階	学習内容	指導上の留意点
導入 10分	1 集合・挨拶・出席確認 2 本時の説明 3 本時の課題 ・ AED の使用や CPR が必要な場面に遭遇した時、とるべき行動を考え、実行できるようになる。	○素直な気持ちで取り組むことができるようにする。 ○誰もが遭遇する可能性があるという緊張感ももたせる。
展開 30分	4 心肺蘇生法の手順の確認 ・教師は、大きなジェスチャーで演示を行う。 5 班で、心肺蘇生法の実習 <役割分担> ・実習者・応援者（救急車要請） ・手順確認係 <手順> ①周囲の状況の観察 ②意識の確認 ③応援の要請 ・ 1 1 9 番通報 ・ AED の手配 ④呼吸の確認 ⑤胸骨圧迫 ⑥ AED の装着 ・心電図解析、電気ショック	○教師が模範を行い、ワークシートを用い、手順を確認させる。 ・教師は、大きなジェスチャーで演示する。 ○役割を決め、より正確に実習が行えるように指導をする。 ・隣の班との間隔を大きくとるなど配慮をする。 ・手順確認係には、チェック項目を用いて、確認させる。 心肺蘇生の確認チェック項目内容 ① 周囲の安全を確認できる。 ② 倒れている人に呼びかけることができる。 ③ 友人や他人に応援要請ができる。 ④ AED の設置場所を把握している。 ⑤ 1 1 9 番通報で、場所を伝え、口頭指導に従い動くことができる。 ⑥ 胸とお腹の動きを見て、呼吸をしているか確認ができる。

	<p>⑦胸骨圧迫再開</p> <p>6 5分間胸骨圧迫</p>	<p>⑦ 心臓の位置を知り、胸骨圧迫ができる。 ⑧ 交代をしながら心肺蘇生を継続してできる。 ⑨ AEDを正しく使用できる。</p> <p>○AED電気ショック後、救急隊に引き継ぐまで、又は傷病者に呼吸や目的のある仕草が認められるまで、心肺蘇生を続けることを説明する。 ○救急車が到着するまでに、全国平均で約9分かかることを理解させ、救急車到着までにできることを考えさせる。 ○バイスタンダーが、いざという時に安全に配慮しつつも心肺蘇生を遅延なく実践しなければならないことを理解させる。 ※バイスタンダーとは救急現場に居合わせた人（発見者、同伴者等）</p>
<p>ま と め 10 分</p>	<p>7 ケーススタディ</p> <p>①子どもだった場合 ②雨で体がぬれていた場合 ③女性だった場合 ④妊婦だった場合</p> <p>8 AED・CPRの重要性を理解し、実行することの大切さを理解。</p>	<p>○AEDを用いたCPRを行う際、考えられるケースを挙げ、実際の現場をクリアにイメージさせる。 ○心停止はほっておけば短時間で死に至るので、完璧ではなくても救命処置を行えば、救命の可能性が高まることを確認すると同時に、救命処置を行っても救えない命もあるという事実を知り、ストレスを抱えた場合は、周囲の大人に相談するように伝える。 ○善意に法的責任なし。</p>

【準備物】

AEDトレーナー(7) 心肺蘇生訓練用人形(7) 気道確保説明モデル

実践上の留意点

1. 授業説明

心肺蘇生法の意義や、具体的イメージを持たせる学習を1時間行った後の実習だったため、生徒は実習の必要性を理解し積極的に活動することができた。また、広島大学医学部・歯学部より心肺蘇生訓練用人形7体と、AED トレーナーも7台借用出来たため、胸骨圧迫のみを体験するのではなく、実際のAED トレーナーから発せられる指示に従って行動することも体験出来、素早く対応するのがいかに難しいかも理解できる貴重な機会となった。

授業を始めるにあたり、実際の行動パターンなどをガイドラインに沿ったかたちで教師が教示した。このとき、余計な行動や言葉は排除し、あえて無機質で大げさなものを示し、生徒らの記憶に残りやすいよう配慮した。また、主となるバイスタンダーとサポーター両者に目を向け、言葉や行動を読み取るよう指示し、どちらの役割でも対応できるよう促した。今回は5~6人のグループに分かれ、男女の差にも気づけるよう、男女混合のグルーピングを行った。お互いの行動や技能を観察したとき、男子だけ、女子だけの時よりも、自らの役割に違いがあることに気づきやすいように活動グループを設定した。

AED-CPRのチェック項目は、ホワイトボードに示し、互いに指摘し合える状況をつくったが、AED使用後に心拍が戻らなかった場面では、チェック項目すべてを満たした後に、自分たちが出来る行動が胸骨圧迫であることに気づくよう誘導した。実際に救急車到着平均時間約9分を連続させることは授業時間から難しかった為、5分間の連続胸骨圧迫を課題として、各グループ行わせた。可能な限り、1人で行うよう指示し、出来た者の感想、出来なかった者の感想を共有した。傷病者が雨に濡れていたら、妊娠している女性だったらなど、あらゆるケースにも触れたが、座学1時間、実習1時間、さらに座学でまとめを行う時間を確保しなければ、効果的な技能や知識の定着は難しいと感じた。

2. 研究協議より

・活動中には男女の体力差などにも気づく場面もあったが、自らの役割はバイスタンダーの構成によって変わることを教師が機を見て助言する必要がある。しかし、ほとんどの保健授業では1クラスに1人の教師が担当となるため、生徒らの気づきに対するフィードバックが難しく、大きな課題となった。

・保健授業のみ、1時間で実習を行う難しさを感じた。今回はハード面を充実させることができたため、生徒らの積極的な活動から見てきた成果や課題の共通項を取り上げ、あらゆる場面を想定し、さらに活動へ落とし込む事も出来たが、ハード面を確保出来なかった場合の本授業は、リアリティの面からも困難な授業になると再認識した。

・心肺蘇生法の実習の頻度について考える必要がある。避難訓練の頻度で、1学期だけでなく、定期的に実施するべきものでないか。時期的には難しいかもしれないが夏休み前の実習は非常に意義あるものになる。そして、頻度を増やした場合、保健の授業だけでは時間的にも難しいため特活やLHRを利用することも考えていくべきである。

